

原子力委員会第33回市民参加懇談会議事録

1. 日 時：平成21年1月14日（水）13：30～15：30
2. 場 所：中央合同庁舎4号館 10階 1015会議室
3. 出席者  
（市民参加懇談会）中村座長、浅田委員、新井委員、出光委員、小川委員、  
小沢委員、東嶋委員、吉岡委員  
（原子力委員会）近藤原子力委員長、田中原子力委員長代理、松田委員、伊藤委員  
（内閣府）土橋参事官、牧補佐
4. 議 題  
（1）市民参加懇談会 in 鹿児島 の開催について  
（2）今後の市民参加懇談会について  
（3）その他
5. 配付資料  
資料第1号 市民参加懇談会 in 鹿児島 の開催について（案）  
資料第2号 今後の市民参加懇談会について  
資料第3号 第32回市民参加懇談会議事録

○中村座長 それでは、皆さんお疲れさまです。ご苦労さまです。

第33回になります市民参加懇談会、定刻でございますので始めさせていただきます。

昨年、最後にお話ししたときに、きょうは専門委員全員に出席を期待していたんですけども、きょうはどうしてもご都合がつかないということで、岡本委員だけご欠席でございます。ほかの皆さんはご出席いただきましてありがとうございます。

本日の議題なんですが、前回ご検討いただきました市民参加懇談会の地方版 i n 鹿児島 の開催の準備が進められておりますのでこの件と、それから今後の市民参加懇談会についてということが議題になります。

それでは、まず事務局のほうから、本日配付の資料の確認からお願いいたします。

○事務局 事務局でございます。資料の確認をさせていただきます。

まず、議事次第が1枚ございます。それから座席表が1枚ございます。それから資料1号といたしまして鹿児島での開催の案という、これは表裏、裏に地図がついてございます。それから資料2号ということで、今後の市民参加懇談会についてという資料でございます。それから資料3号といたしまして、前回の議事録でございます。不足ございましたら事務局までお願いいたします。

○中村座長 資料のほうはよろしいですね。

それでは、早速、市民参加懇談会 i n 鹿児島 の開催につきまして、審議に入りたいと思いますけれども、お手元に簡単な概要をお配りしてございますけれども、一応事務局のほうから i n 鹿児島 のご説明をお願いします。

○事務局 資料第1号をごらんください。市民参加懇談会 i n 鹿児島 の開催について（案）ということでございます。まず日時でございますが、来月2月15日日曜日の午後1時からを予定してございます。時間としては1時から3時間程度を考えてございます。

それから2番のところ、会場でございますけれども、このブルーウェーブイン鹿児島という会場を今押さえてございます。裏面に地図がございますけれども、鹿児島の駅から少し行ったところでございますが、この天文館というあたりが一番にぎやかなエリアということで、そこに行きやすい、人が集まりやすい場所ということで、この会場を押さえさせていただきました。参加者席を200名程度ご用意してございます。

それから、テーマでございますが、前回ご議論をいただいたのを踏まえまして、『原子力 ～知りたい情報は届いていますか～ 「地球温暖化と原子力」』というテーマを設定してございます。

それから4番のところ、プログラムでございます。まず冒頭に事務局のほうからですが、開催の趣旨というのをご説明させていただいた上で、早速第1部ということでご意見の発表と意見交換ということで考えてございます。ちょっとご意見発表のパートのところでは、まず一番最初にご来場の方の意識や知識をそろえるという意味でも、地球温暖化と原子力の現状についての説明というのを少し冒頭に入れることを考えてございます。その後にご

意見発表者としてお願いしている数名の方から、ご意見をいただく形をとろうと思っております。

現在、日程を押さえてお願いしておりますのが2名の方を確保しているところでございますが、一人目が石窪奈穂美さんという、鹿児島の方にお住まいの消費生活アドバイザーの方と聞いてございます。それからもう一人は鹿児島大学の名誉教授、工学部の教授です。名誉教授の松村博久様。このお二人については2月15日お願いしますということでございまして。

それからこのお二人に加えて二、三名程度、少しふやしていきたいということで、今、人を少し当たりつつあるというような状況でございます。環境活動を実践されている方ということで、今ちょっと探しているところでございますが、特に地元でその環境関係の活動に取り組まれている方で、ちょっとエネルギーの面ではどこまでちょっと知識があるかどうかわかりませんが、環境側からご意見いただけるような方というのをちょっと探しているところでございます。

それから前回もございましたが、学生さんと呼ばないかということでございましたが、まず鹿児島大学のほうで、今ちょっと人を当たっているところでございまして、資源エネルギー庁がやったワークショップに参加された学生さんを、今ちょっと当たれないかということで探しているところでございます。ただちょっと2月のこの時期というのは、学生さんなかなかつかまらない時期というようなこともございまして、ちょっとまだ確保するには至っていないという状況でございます。

それから九州大学の学生の方、そういう感じでございますが、これは吉岡委員のほうからご紹介をいただいてございまして、ちょっとそれは吉岡先生から後でご紹介いただければと思います。その九州大学の学生さんは、一応予定はあけてくれているようでございます。ご意見発表者は現在アサインしている2人プラス二、三名の方からご発表いただいた上で、懇談会の構成員、ご意見発表者との意見交換をやっていただく、ここまですべてを第1部としてございまして。

それから第2部ということで、これはいつものようにでございますが、会場に参加された方々からご意見をいただくということで考えてございます。

事務局からの説明は以上でございます。

○中村座長 この日程は2月15日になってしまったんですけれども、14日だったら小川さんも出席いただけたんですが、残念でございます。ほかの方は一応、ご出席いただけるというふうに伺っております。

それでは、このin鹿児島で開催（案）について、皆さんからご意見をお伺いしたいと思います。まずはご意見発表者の件でございますけれども、今事務局から説明があったような現状にありますけれども、石窪さんや松村先生は浅田さんや私や東嶋さん、もう既にご存じの方なので、ある程度発言内容なども期待できる場所はあると思います。学生

さんのほうなんです、今ありましたように、鹿児島大学のほうで院生になるかもしれませんが、今当たっているところと、それから前回もお話しあった、九州大学の学生さんということで、この辺はちょっと吉岡先生からのご発言をいただきたいと思います。

それを含めて、皆さんこのご意見発表者については、何かご意見あるでしょうか。

まず、吉岡先生、ご紹介を含めて。

○吉岡委員 先回、我が九州大学の21世紀プログラム課程についてお話ししましたが、特定学部には所属せずに、学生一人一人が自主的にチューターや他の教員の指導のもとでカリキュラムを組んで、自分なりの学問をつくっていくという、そういうプログラムでありまして、多くの都道府県から学生が来てくださっているわけですが、投げかけられた議論やデータに対して非常に反応性が高いとか、意見発表とか討論が得意であるとか、こうしたもののスキルが高くて、ちゃんとした議論ができるという、そういうのが全体的な特性でございます。

そういうことでしたら、この会にはふさわしいのではないかというふうに思いまして、だれかいないかということをお考えしましたところ、たまたま私の授業、社会学（科学技術論）という科目ですけれども、150人ぐらいの学生が受講しているのですが、一番前の席に座って、熱心に聞いてくれている21世紀プログラムの2年生が印象に残っていて、彼ならいいのではないかというふうなことで、推薦をした次第です。名前は宮越成彬君という宮崎県出身の方です。宮崎県の高校で物理部の部長さんをやっていて、いろいろ科学関係の実験コンクールなんかで入賞したりとかそういう経歴を持っていて、宇宙生物学をやりたいと言って入学してきたんですけれども、自然科学にもある程度明るいということで、しかも積極性とか非常にバイタリティーのあるいい生徒です。ある意味で、私とは全く別のタイプでありますけれども、非常にさっぱりしたいい男であります。もちろん私の授業を聞いているわけですから、原子力についてやや批判的なことを言うかもしれませんが、それほど論争的でもないと思いますのでぜひにということで、宮崎と鹿児島は隣県でもありますし、いいんではないかということで推薦した次第です。

よろしくご審議をお願いします。

○中村座長 わかりました。

そういう学生さんなら、ご出席いただいてよろしいのではないかと思います。

それからもう一人、本当にせっかくですから地元鹿児島大学の学生さんもと、今考えていますので、今、ご紹介のあった宮越君とキャラクターがだぶらない人を、担当教授などと話して推薦していただくかなと、一応今考えています。

この宮越君招へいについては、特にご異議はございませんでしょうか。会ってみたいですね。

ほかのご発表者について何かご推薦される方とか、こういうジャンルの方とか、ご意見ありましたら。まだちょっと、一応説明あったように、環境に関心があって活動している

方ということで当たろうとしているんですけども、ほかに何かあれば。

○小川委員 もう一人の大学生、できれば女子大生がいればいいなと思いました。

○中村座長 希望として伺っておきます。

そうですね。それもあるし、松村先生もいらっしゃって、その宮越君がいるということになると、やっぱり女性は石窪さんだけだとあれなんで、もう一人はいずれにしろほしいところですから、それが学生さんになるか、一般の方になるかというところですけども。

○小川委員 九大に限らなくてもいいかなと思います。九州の大学。

○中村座長 それは逆に九大はもういらっしゃるわけだから、福岡ね。だから鹿児島大学というか、鹿児島の大学生を一応今考えている。

○浅田委員 教職課程にいらっしゃる方とかどうでしょう。

○中村座長 その辺は、まだこれから当たる、下打ち合わせを若干はしているようですけども、教授とはコンタクトとっているようですが、その辺は幅を広げてみていただいても結構です。教職というのは結局、これからの子どもへの教育ということを考えての意味ですね。このあたりはちょっと松村先生には、エネルギー教育の観点からのご発言いただけるようには一応私も個人的にはお話ししてありますので、教育関係については必ず議題にはなるということです。

特にこういう方というのがいらっしゃらなければ、事務局に折衝を任せる形でよろしいですか。皆さんの意向としてはそういうことだということ。

それでは、人選につきましてはご発表者についてはそういう線で進めさせていただきます。

次に実際の内容のほうなんですけれども、ご意見発表いただく前に、やはり会場の皆さんと地球温暖化防止という観点での原子力のポジションというあたり、これも世界的なですね。そのあたりの共通認識を持っていただきたいので、最初にちょっとレクチャーの時間が必要かなと思ったんですけども、事務局が説明をするパターンと、レクチャーにやっただくパターンと、両方今までやってきているんですが、ちょっと言い方は悪いかもしれませんけれども、事務局が最初に話をしてしまうと、何か説明会風にどうしてものになってしまうんですね。ですから説明をして聞いていただくというよりは、そこで共通認識を持っていただいて、そこから喚起してとにかくいろいろなご発言をいただくというのが市民懇の趣旨なので、できれば事務局が事実関係だけ説明するというよりも、もう少し個性のある説明のほうがいいということで考えて、私の案なんですけれども、委員で出席もしていただくので、出光先生にここの最初のレクチャーは、今、原子力は、そしてその地球温暖化防止は、というあたりを短くお話ししていただいてスタートするというのはどうかとこう考えているんですけども、よろしいでしょうかね。ご本人はよろしいでしょうか。

○出光委員 いろいろ幾つか資料を検証してみます。

○中村座長 はい。七、八分、長くても10分ですね。余り最初に重いとあれなんで。その後、また意見交換のときにも関連することはご発言いただけると思うので、最初は七、八分でやっていただけますか。

○出光委員 はい、わかりました。

○中村座長 ではこれは出光委員にお願いするという事で進めたいと思います。

それで後の進め方なんですけれども、前回のときにいろいろ私も申し上げて、ちょっと時間短縮してでも一気通貫でやるかということ saying it and but, せっかくなんで与えられた時間をフルにやっぱり使ったほうがいいので、一応3時間のパターンで考えて、3時間となるとやっぱりちょっと休憩をとらないといけないですよ。これはテクニカルな休憩でいいと思うので、ここからは前回もお話した趣旨なんですけれども、1部、2部を分けて休憩をとってしまうと、2部の会場からのご意見というのが一回ぶつと切れて、仕切り直しになって、しかも1部のご発表のほうの時間が例えば2時間かかる、2時間以上かかるということになると、2部でせっかく区切ったのにせいぜい30分か40分しか時間を持ってないという形になるんで、流れとしては今考えているのは、ご発表者5人なら3人終わったところ、6人ならやっぱり3人終わったところぐらいで、委員の皆さんと意見交換をしていただいて、それで大体90分プラスぐらいの時間を考えて、そこでもうテクニカルに休憩、トイレタイムというのをとってしまおうかと。戻っていただいて、残りの方にまたご発表をいただいて意見交換して、その意見交換の流れから、続いては会場から自由にご発言くださいというふうにもっていこうかなと。一応、そういう構成を今考えているんですけれども、いかがでしょうか。そんな形でよろしいでしょうか。一気に短くというと、近藤委員長が、いや、会場からの発言は大事にすべきだと、前回もご指摘をいただいたので、それを大事にする意味でもちょっと流れが途切れないほうがいいかなと思うので、そんな形でもう物理的に時間がある程度来たところで、3人ぐらい終わったところで切らせていただくという。

○小沢委員 結構です。

○中村座長 ではそういう形で1部、2部は進めさせていただきます。いわゆる1部の前半の最後のところで休憩が1回入る。1部の残りとも2部、会場からの発言が続く。それではそういう構成でよろしいでしょうか。

あと、会場のほうなんですけれども、一応ホテルのいわゆる宴会場スタイルのところですか、平土間でできますので、いつものというか、我々の委員と発表者を周りに囲んでいただくという形式はまずよろしいですよ。それから前回も会場からの発言がもう少しふえる形はとれないかというあれがあったので、それは具体的にはマイクの数をちょっとふやすぐらいのことで対応しようかなと思っているんですけれども、基本型はそれでよろしいですね。

○小沢委員 結構です。

○中村座長 ではそういう形にしましょう。薩摩川内と鹿児島はちょっと離れてはいるんですけども、ご案内のように、九州電力が川内発電所の3号機の建設、申し入れをもう行いましたので、地元ではそれなりにリアクションがあるようです。川内のほうでははっきり反対行動をとられている皆さんもいらっしゃるんで、そういう批判的、そもそも原子力に批判的な方たちがご出席いただけるという可能性もありますので、そうなるともた違う意味で活発な意見交換ができるかなとは思っているんですが、現在のところはまだわかりません。まだ開催を発表していないですけども、現状、そんなことに地元はあるので、それなりのご意見をお持ちの方がご出席いただけるかなとは思っております。

ただテーマを、一応、地球温暖化防止という環境テーマの中での原子力の位置づけというところなんで、そこにうまくはまったご発言がいただけるか、そうではないかというのはやっぱりちょっと予測が難しいところですが。実際にそうなった場合には、あえてきょうのテーマとは違いますからというようなことで遮ることはせずに、お考えをお聞きするというスタンスで臨みたいというふうに思っております。

そのほか、in鹿児島で開催について、何かご意見とかお聞きになりたいこととか。一応、物理的には東京、鹿児島、飛行機ですと日帰り可能は可能なんですけど、先日のように福岡、熊本、鹿児島でも雪が降るということも考えられるので、私自身は一応前日に鹿児島に入っていようとは思っておりますが、それぞれ皆さんのスケジュールもあるでしょうから、後日、事務局からご案内しますが、当日の11時半ぐらいになるかな、集合が。11時半から12時ぐらいですね。会場のこのホテルに集合ということで。もし、前日お入りになって前泊されるということで、この会場のホテルということでしたら、それはそれでまたご連絡いただければとれるようにはいたします。ちょっと今までの中では遠いですからね。その辺、ちょっと皆さんスケジュールをお考えになって、事務局と相談していただきたいと思います。ということで、準備をひとつ皆さんよろしく願いいたします。あと1カ月ですので、よろしく願いいたします。

○近藤原子力委員長 事前に参加者にご意見をいただくのですね。

○中村座長 そうですね。これから多分、原子力委員会がきのう終わったところだから、来週で正式決定でしょうから、来週告知への準備が入ると思うので、それで応募されるときにまた事前のご意見なり寄せられると思いますので、それは集まった限り、手元に皆さん事前にメールなりファックスなりでお送りできるようにという準備ですね。

○出光委員 最初の説明ってスライド使うんですか。

○中村座長 使っていていいですよ。使ったほうがいいんじゃないですか。

○出光委員 机の配置は丸いんですか。

○中村座長 丸くてもまた設置場所をちょっと考えれば。普通、オーディエンスの方から見えるように、事務局と座長と一部メディアの方がちょっと振り返るぐらいの位置に多分設定してもらえば使えると思うんですよ。ですから一応、スライドはありのほうが多分い

いと思うんですね。一般の方にお話しするには、お話だけよりは。

細かくは一応事務局と打ち合わせしてください。プロジェクター等は準備はできると思いますので。

では、そんなことで地方版は久々に遠くへ参ります。九州、鹿児島、頑張りたいと思いますので、皆さんよろしく願いいたします。

それでは in 鹿児島はそういうことで、開催準備を事務局のほうで進めてもらいます。

続いて、前回の最後にもちょっと近藤委員長のほうからご発言があったんですけども、これからの市民参加懇談会ということで、まずは近藤委員長のほうからお考えをお聞かせいただきたいと思います。

○近藤原子力委員長 前回の最後に市民懇談会の今後について考えるところをやや唐突に申し上げたわけですが、今日は考えるところを紙にしてきました。お手元の資料2号でございます。市民参加懇談会の現状についての認識ですが、これは平成13年に設置され、コアメンバーがファシリテーターとなって市民との対話型の意見交換会を全国各地で、これまで17回開催してきました。平成16年夏から開始した原子力政策大綱の策定作業においても、その準備段階で開催されたこの懇談会で得た市民の関心事をも念頭に検討課題を整理し、さらには、その審議の過程において「ご意見を聴く会」の一つとして、この会を開催して審議に反映することも致しました。

その後、原子力委員会におきましては、政策大綱において市民との相互理解を踏まえた取組が重要と考えられた食品照射に関して、専門部会を設けて審議を行う際に「ご意見を聴く会」を開催する、さらには政策大綱に定めたところにしたがって新たに立ち上げた政策評価部会において各政策分野の取組の評価を行う作業において、分野ごとの評価のとりまとめのたびに「ご意見を聴く会」を開催してきたわけですが、こうした会合は私が座長を務めますが、「市民参加懇談会」の運営様式を取り入れて行って参りました。したがって、原子力委員会としては、「市民参加懇談会」が生み出した市民との相互理解活動の方式は原子力委員会の活動の基本パターンの一つとして定着しつつあると考えています。

しからば、現在の皆様との今後の関係について、今何を考えているか。これについては、先ほど申しあげました政策評価活動が4月過ぎには分野を一巡することが予定されていまして、その段階で、原子力委員会に係るさまざまな活動を総括した上で、今後何をどう検討するべきかということについて考える時間を持ちたいと考えております。

過去およそ5年ごとに長期計画を見直すということが行われてきているところ、政策大綱制定から3年以上経過した段階でそうした検討を行うとすれば、その結論として、その見直しにむけての活動を始めてはということになるかなと思ったり、周辺の状況が必ずしも思ったように事が進んでいないので、改訂作業に取りかかるには早すぎるというご意見にそうかなと思ったり、いろいろと考えているわけですが、いずれにしても、そういうことで、この原子力政策にかかわる広聴・広報活動としての「市民参加懇談会」につつま



しても、これまでの経験を通じて得られたこの機能のあり方に係る知見を総括していただいて、活動をここで一たん終了することにしていただいと考えるところでございます。

そこで、この鹿児島の後には皆さんにもう一度お集まりいただいて、これまでの市民参加懇談会の活動を総括し、こうした分野の取り組みについて、原子力委員会にご提言をいただけたらありがたいと考えております。私からは以上です。よろしく申し上げます。

○中村座長　ということでございます。というのが近藤委員長というか原子力委員会のお考えでございます。今のご発言について、ご質問とかご意見とかございましたら、お伺いしてまいりたいと思いますが。

吉岡委員。

○吉岡委員　活動終了ということについては、特段、異議はないのですが、歴史的に見ますと、市民参加懇談会の源流に当たるのが1996年から何年間にわたって開かれた原子力政策円卓会議でありまして、前の木元座長はそれの発展形として、この会についてイメージしていたように思うのですが、原子力政策円卓会議はどのぐらい成果があったかはよくはわかりませんが、私なんかは随分引っ張り出されましたけれども、少なくとも原子力政策のあり方について、いろいろ幅広いスペクトルの意見があるんだということを、概念的ではなくて生身で知り合ったというような、言っている人の顔つきとか、そういうことも含めて知った、そういうことにおいて意義があったと思います。

この市民参加懇談会については、最初のうちはそういう円卓会議的な人の選び方とかそういうようなこともやっていたように思うので、やはりそういう機能が継続していたかなというふうに思うんですけれども、時間がたつにつれてイベント開催というところに傾斜をしていったというのが私の認識であって、ですからイベント開催を続けるのもいいんですけれども、かつて円卓会議が担っていた機能を発展させるというような選択肢も、これは原子力委員の方々が最終的に決めることだと思いますけれども、私の意見としてはそういうところもあるのではないかなというふうに思っています。その場合に一つ、余り参考にならないかもしれないんですが、例えばアメリカではキーストーン・レポートというのがあります。ここにいる方は全員ご存じかと思うんですけれども、さまざまな立場、これは推進派対批判派というふうな二分法でくくれるわけではないし、何か重大な争点が生じた場合には立場が多様であったということが、その都度確認されるわけだと思っているんですけれども、今もそうなんだと思います。多様な立場の人々の共通認識をまとめたものがキーストーン・レポートです。

そういうように、原子力をめぐる共通認識がどこにあって違いがどこにあるかということ丁寧明らかにし、それを書き込むというような、アメリカではそういうことをやっておられる。日本でもこれができたらなと思います。共通認識は実際としてかなり多いわけですね。日本でももしかしたらそうではないだろうかというふうに思います。表に出てくる推進派と批判派の双方の言い分は、水と油のようなんですけれども、実際はそうで

もなく、本音を語り合えば建前論とは違うのではないだろうかというふうに思っているんです。そういう立場の違う人々が率直に利害を背負わないで議論ができる共通認識をつくっていくというような、例えばそういう機能を、本来はそれは審議会が果たせるならば果たすべきだということでもいいんですけれども、どうも私の意識ではそうはなっていないと思うんです。そのような異なる立場の人々の意見を理解し合い、合意を見つけていくという、そのような活動を主にするような、そういう組織を考えると、そちらのほうが私としては建設的だと思っておりますので、イベント中心の活動を続けるよりはそちらがいいと。別に二者択一の問題ではないんですけども、今の組織の活動を休止するというこのことについては、それゆえに特段の異論はございません。

○中村座長 総括は総括でまた機会を設けますけれども、きょうほぼ全員出席ですので、一応全員からお伺いしてまいりたいと思います。順番はいいですか。

では新井委員どうぞ。

○新井委員 別に特別なことを言いたいわけではないんですけれども、これは私は正式に初めて聞いた話ですから、むしろ原子力委員会からこれまでのこの活動をどう見ていき、こういう経緯でやめることにしましたという説明があってしかるべきであって、こちらはいきなり総括と言われても。次回に何か意見があるかもしれませんが、どう考えたんだと。広聴・広報活動のあり方、総括していくことが必要となっているとなってますけれども、原子力委員会がどう総括したかということはまず我々に示されないとおかしいんじゃないでしょうか。

確かにこれを続けていいのかどうかというのは、大いに議論のあるところでしょうから、それはそれで結構ですけれども。それと同時に、判断を下したほうがむしろきちんと徹底して、我々にこれはやめますよと、もう必要ありませんということを確認していただいたほうが、また次の総括も我々もやりやすいですし、自分たちがどう考えていたということも発言しやすいのですが、その辺はどうなのでしょう。委員会側としてはこの市民参加懇談会をどう見ていて、もう役割は終わったんだということであれば、こういう形で役割は終わったんで、また変わるべきようなものがあるのかどうか、その辺も含めましてきちんとした説明を私はいただきたいと思います。

○東嶋委員 私も賛成です。各委員の方にご意見いただきたいと思います。

○中村座長 最初の経緯からすべてご存じなのは委員長。そのほかの委員の皆さんは、就任されてから何回かおつき合いをいただいたというお立場の違いはありますけれども。

○近藤原子力委員長 発言してよろしいですか。この会に対する認識についての委員会の考えはいまご説明申し上げたとおりで、これ以上も以下もありません。私はこの会合の最初の経緯は実は知りません。吉岡委員の方が詳しいのかもしれないと思います。たしか、円卓会議は、原子力委員ではなくて、それ以外の方が参加者間の対話をコーディネートし、何回かの会合の後、それをとりまとめて委員会に提言をする仕組みでした。我々は発言

者として呼ばれ、でかけていっていろいろなことをいった記憶があります。ただ、それが結果として行った提言がなんであったか、時系列的に考えれば、その総括が2000年の長計の審議のあり方や内容に反映されることになったはずですが、そこはどうでしたか。私は第一分科会の座長を仰せつかり、丁寧なデータに基づく議論をするように、なるべく批判的な意見を丁寧に聞くように心がけましたけれども、それは円卓会議に参加した私個人の総括に基づくもので、委員会から円卓会議の結果を踏まえてそのように運営をとるという具体的な指導というか指示をいただいた記憶はありません。

で、市民懇が設立されたのはその後ですね。私も1回ぐらいは参加したように記憶していますが、それと、2000年長計にある、原子力政策円卓会議に続く新たな意見集約の場の在り方を検討する、という決定とどういう関係にあるか、会合を重ねて、何らかの意見集約を行った形跡はないように思いますが、あったのかもしれませんが。

そういうことを不勉強のままに、私は2004年に原子力委員長を拝命して、原子力政策大綱の策定作業を始めることになったわけです。で、この作業を始めるにあたって、この市民懇をどう位置づけるか、私には、これは市民と対話すること自体を目的とする場と理解したところ、そうした作業と、大量の情報を整理・分析し、利害関係者の利害を調整して政策案を設計・評価していく作業とは、並行的には進められないわけですから、この会合をどうしたものかと考えた記憶があります。で、準備段階においては、主としては、拡大原子力委員会にいろいろな方をお呼びしてご意見を開陳・議論していただき、この市民懇談会は広聴の場として活用させていただくことにしました。

で、策定会議が開始されましたら、NGOからも委員を選んでいましたので、その方から市民目線で会議ごとにご提言やご批判をいただく、その上で、その場と市民との対話の場にずれが生じている度合いを半年に一度程度でしたけれども、市民参加懇談会を通じてチェックするという運用をさせていただきました。ですから、政策大綱の審議中においては、個人的には、この場は政策決定の車の両輪の一つとして機能していただいたと評価しています。

政策大綱が決定された後は、私どもが始めた主な仕事は原子力施策の評価活動です。分野ごとに評価部会を動かして、その審議の過程で市民との意見交換を行うことにして、今日に至っています。原子力政策に対する国民の意見集約の機能はいわばこのようにして制度化したのです。他方、この市民参加懇談会は、私流の表現では、市民の意見のアンテナショップとして開催を続けることにしました。これは、原子力政策大綱でも強調していることですが、各省庁における原子力に係る取組を策定・推進する際に市民との対話が重要であるとした結果として、さまざまな広聴・広報の取り組みがなされるようになってきたのですが、それがどういう効果を持っているのか、市民参加懇談会でランダムにアクセスしてみてもモニターしたいと考えたわけです。

例えば、原子力安全・保安院や資源エネルギー庁には、原子力行政に係る判断や決定に

ついて利害関係者に広報し、時に説明会を開催することの重要性を繰り返し強調しました。その結果というつもりはありませんが、実際、そういう活動の頻度は、その後増してきているのですが、市民参加懇談会でご意見を聴いて、そうなのかなとか、どうもとてもそうは思えないなという感触がつかめたように思う瞬間があるのです。そう思えたときにはこれがこの懇談会の役割、成果と思ったものです。

そういうことで今日まで皆様にこの会合をお願いしてきたのですが、一方で、この市民懇談会が目指した広聴・広報活動がそれぞれの機関で、時にはこれをロールモデルにして展開されてきている現実を踏まえて、さて今後の政策決定過程において原子力委員会としてはこの機能をどうすべきか考えてみるべき時期がきたと、進歩の著しいIT技術の活用なども含めてどうするのがよいのかここらで整理をしたいと考えるようになったのです。ですから、この市民懇談会の価値がなくなったと考えるから店じまいしたいということではなくて、委員会の使命である政策の企画・審議・決定を行う次の大事な取組を前に、委員会として自らそのあり方を考え、設計して実行していかなければならないと考えるところ、この懇談会はここで閉じることとし、懇談会ごとにはデータを整理し、提言もとりまとめきていただいているわけですが、ここで、それらを通覧するなりして原子力政策の策定・推進に係る広聴・広報活動に直接ご参加いただいた経験を踏まえてのご意見をとりまとめいただけると、総括していただけるとありがたいと申し上げた次第です。私からは以上です。

○中村座長 我々委員のほうとしては、どういうふうに最終的に総括して終わるかというのは別の機会にさせていただくことにして、きょうはせつかくですからほかの原子力委員の皆さんも市民懇をどういうふうにごらんになっていたか、どういう印象を持たれたか。今委員長のお話があったように、これからの原子力委員会の広聴活動の方針を決定していく中で、どういうふう到我々のことを受け取られたか、一言ずつお伺いしてまいってよろしいでしょうか。

それでは、田中代理からお願いいたします。

○田中原子力委員長代理 原子力のいわゆる政策というか、実際に原子力をいろいろな意味で実施するという言い方をすれば、そういうことをする上での国民の理解を得ることについては、私もここに来る前に、現場、地元対策までやったし、いろいろなことでその重要性を十分認識はしているつもりです。

ここに来て原子力委員会とは一体何だろうかというのは、ちょうど2年たったわけなんですけど、やっぱりある人はルネッサンスとかなんかいいますけれども、実際に原子力委員としてはそんなことを感じている状況ではないというのが現実です。非常にかなり深刻な課題がたくさんあって、これをどういうふうに解決していくかというときに、国民の意見を聞くということも非常に大事なことだとは思いますが、もう一つ原子力委員会として限られたリソースをどう使っていくかという意味で、少しこういった「市民参加懇談会」と

か「ご意見を聴く会」もそうなんだけれども、やった割になかなか自分自身の悩んでいる政策にぼんとはね返ってくるような感じは、実は正直に申し上げると、この2年間感じていないです。

かつ、さっき申し上げましたように、国民の声をどう酌み上げるかというのは、非常にこれはある意味では永遠のテーマなのかもしれませんけれども、だから引き続き何らかの形で努力はすべきだとは思いますが、それをどうするかというのは一回ここで2年間、「市民参加懇談会」と「ご意見を聴く会」が大体私にとっては似たような感じの場だと思うんですが、それを総括して次に新しい方法を考えていく時期でもいいではないかと。かなり長く続いているということですので、そんな思いを持っています。

もう一点は原子力委員会というのは意外と会議ばかり多くて、政策を本当にどういうふうにするかという点で、事務局も含めて我々も若干力不足なんですね。だからそれをどういうふうにするか、我々の力をどういうふうにするかという点で、もう一方では考えるべき時期、今そんなことを問われているかなということ、過去の歴史を私はつぶさには知りませんが、そういうことを感じながら、一応ここで一回閉めて、いろいろな長い10年近い経験をまとめていただければ、またそれを次に反映できるのではないかと。先ほど吉岡さんからキーストーンレポートの話も出ましたし、そういうことも非常に大事な試みかもしれません。そんな感じはします。

○中村座長 ありがとうございます。

松田委員をお願いします。

○松田原子力委員 一時市民懇のメンバーでもありました。吉岡さんの話ともかかわりますが、そもそもこの会ができたのは、「もんじゅ」の事故の後、円卓会議が開かれて、原子力にさまざまな問題があることを有識者の方にご指摘いただき、非常に活発な議論が行われました。その中の答申の中で大事な点がありまして、中立機関をきちんとつくるべきではないかというのが、かなり大きく提言として出されているんですが、それを実現の方向へ導くにはまだ難しかったので、円卓会議を引き継いだ形で市民懇が動いていったのだと思います。私たち市民懇のメンバーの手法がどこかに受け継がれていったかといいますと、今行われているエネ庁など施策によい方向で引き継がれていっていると思います。エネ庁は自治体キャラバンを今年度25回やっています、ワークショップを15回やっています。去年は自治体キャラバンを10回、ワークショップを5回行っています。そのほかにNUMOが今年度と昨年度あわせて20回やっています。試行錯誤なんですけれども、お手本になっているのは市民懇の皆さんの手法です。エネ庁やNUMOはいろいろなやり方を学びながら体験を積み重ねているということで、市民との接点というところでは、割合もうアンテナが広がってきたかなと。

市民懇はほぼ10年たったので、一つの節目でもあります。今後、どういう展開をしていくかというところでは、個人的なまだイメージなんですけど、ヨーロッパに行きますと原

子力政策を持続可能にしていくためには、市民に支えられた透明性を確保していく機関というものが必要であると、ステークホルダーが対話をするのを手伝う中立機関が誕生しています。日本はどうすべきなのか、先生方のご意見を反映させていくような形で、発展しつつここは閉じるという形になればいいなと思っていまして、これからもお力添えをぜひいただきたいので、よろしくお願ひします。

○中村座長 ありがとうございます。

では伊藤委員お願いします。

○伊藤原子力委員 私もこの市民懇、まだそれほどたくさん経験したわけではないんですが、これまでの市民懇に私も同席させていただいて、そこから得た私の感じをちょっと言わせていただきたいと思いますと思うんですが、私は前々から茶の間ということ、これは中部電力で長らく原子力をやっているときから言ってきたことなんですが、こういう原子力に限らず、何でもそうですけれども、世の中に対して何か事業をやったり、施策を講じたり、あるいは政策をつくったりするときに、常に必要なのがやっぱりお互いに意思疎通をよくし、相互理解をしながら進めていくということが必要で、そのための場の設定というのはどこかで必ず考えていないと、ついついお互いにやっていること、あるいは思っていること、期待していること、期待しているとおりになっていると思いつつ、実はそうではなかったというような、相互の間の離反が生じてくるので、それがなくなるといふのはいつも必要だと。これは原子力の政策をやる上では一番上位に位置すると思うんですが、政策あるいは方向を出し、方針を出すところから、それに基づいて施策をやり、さらにそういう枠組みの中で事業をやっていく。それぞれの立場でそういう場というものを考えていかなければいけないということだろうと思います。

そういう意味では、一番必要なのはやっぱり一番第一線でやっていくところのそういう場を常に持って考えていかなければいけないということで、これは現実に事業をやったり、あるいは施策を講じているところで、ここにもお話しありましたように、いろいろなところでそういう場が設定されていると思っています。では、その一番そういう上位のところでは政策をつくり、あるいは方針を出し、方向を出すところで、どこまでそういうことをやっていくのかということだろうと思うんですが、そういう場として一つこの「市民参加懇談会」があり、あるいはその「ご意見を聴く会」があったと、こういうことだろうと思います。

しかし、私はそこで考えなければいけないのは、やはりそういう場を設けられたときに、その場の効率性と効果性というものを常に考えながらやっていかなければいけないということで、そうするとこういう「市民参加懇談会」があり、あるいは「ご意見を聴く会」があったときに、原子力委員会としてまず政策をつくり、その政策が施策に移され、あるいはさらにそれが事業として展開される、あるいは研究の現場でやられていくというときに、それでフィードバックとしてこの政策、自分の今決めてきた政策の決めたときの環境が、

既が変わってやしないか。あるいはそれがちゃんと理解され受け入れられているのか。あるいはひょっとして望まない方向でやられているのかというようなことをにらむ場としてこれがあるとすると、今まで私が出てきた、経験した感じからでは、先ほど委員長言われたようなアンテナショップという表現もありましたが、そういう場で意見が酌み取られてくるということは、私たちが政策を進め、あるいはそれを見直していく上で、多少の参考になるころはあったと思っていますが、必ずしも効率的、効果的であったかというところはやはりこれまで続けてきた中で、一度どこかで点検し総括する必要があるのではないか。それでその場の設定であれば、例えばアンケートをとるとか、あるいは世論調査をするとか、あるいは最近原子力委員会もメールマガジンを出していますが、ああいうところで意見を聞くと、いろいろな手法があると思います。

そういう意味で、私の言い方で言えばこの場の設定という中で、何が一番効率的、効果的なのかということが、これまで17回やってきたものを一度総括する意味はあるのかなと。しかも、今ちょうど原子力政策大綱見直しをするかしないか。これはつまり見直しをするかしないかというのは、一つは前回政策大綱をつくったときの前提となっている条件、あるいは環境が、既に相当変わってしまって、あの政策ではもう今は通用しないということなのか、いやそうではないということなのか、そういうことも含めて見直していくということの中で、こういう国民の意見を聞く、あるいは相互理解をするというこの政策大綱、四十何ページの中で、大体2ページに1回ぐらい「相互理解」とか「対話」という言葉が出てくるわけですが、そういう手法として原子力委員会としても、そういうものをどう持つかということの総括を試みる時期としては、ちょうどいいのではないかとということで、決して今の市民懇が全く意味がなかったとかそういう意味でなくて、そういうもう少し広い、その場という中での一つとして、どうだったのかなという総括はやはりしたほうがいいかと、そういう感じを持ちました。

以上です。

○中村座長 ありがとうございます。

というふうに委員の皆さんは見ていらっしゃるようですけれども。

では我々いわゆるコアメンバー、専門委員のほうも一言ずつ申し上げて、本日は終わりたいと思います。

順番にワンラウンド行きましょうね。浅田さんからどうぞ。

○浅田委員 資料第2号の問題意識と方向性というところを読ませていただいたときは、その意味合いが、やはり理由になっていないなという感じがしました。そして今委員の皆様、全員のお話を伺いつつ、それぞれにお言葉は違うけれども、やはりリソースを有効に使うための費用対効果というところで、効果を感じられていないということが一番明解なところかなというふうに思いました。それは政策を決定していくことにかかわりのある原子力委員の皆様が、費用対効果を感じていらっしゃらないということも必要だけれども、

市民がどういうふうに思っているのか、市民がそれぞれの懇談会をどう評価していたかというようなアンケート結果も並べて見ていく必要があるかなということを感じました。

一言ということで、また機会があればお願いいたします。

○中村座長 ありがとうございます。

新井さんどうぞ。

○新井委員 これはこちらが言うべき筋合いの話では基本的にありません。原子力委員会からの説明があれば私は十分で、やめますという意味を示されればそれはやめますということであって、そこのところは議論しても余り意味がないです。近藤先生が説明する側であって、我々はそうですか、役目終わりました、ということであって、私にとっては、総括することも特段ありませんし、効果がどうかという議論をすればわけわからなくなります。アンケート調査で、知っていますか、知りませんかといういろいろやってきたけれども、これはもう私はどちらかという、やるならやるでなるべく継続してきちんとやっていくということが大事でして、これも何だかよくわからないことをやっているんで。だからこれは余りコアメンバーからやめるとか、やめないべきだという話ではないわけですから、私は総括と言われても何か特別なことを言うようなことは多分ないだろうなど。役回りが終わったということで、それは原子力委員が決めて、それはきっと説明なさったほうがいいんじゃないかというふうには思いますけれども、多分このような内容は新聞のニュースには載らない話でしょうけれども、ある面ではニュースになるような部分もあるわけですから。そちらのほうがかきちんと説明すべきであって、皆さんおっしゃるようにほとんど意味をなさないというのも、私もそうだろうと思いますよ。何か数字であらわせとか、理科系の方はそういうところを堅実にやるんで、私なんかはそうは思いませんから、何かただらでもいいからやっていていいんだろうと私は思っているんですけれども、それもお金のかかる話ですし、経済的な理由からやめるということで、それは一つの判断ですから、それはそれでいいわけなんですけれども。

余りこちらから云々というような話では私はないと思いますので、特段そういう、云々ということはありません。

○中村座長 というご意見をありがとうございました。

出光委員どうぞ。

○出光委員 浅田委員と一緒に途中から入ってまいりましたが、私自身、自分の位置づけがよくわかりませんで、ほかの委員の方々はいろいろな市民活動のすそ野を持っておられましたが、私は何も持っていない段階で入ってきましたので、一体私は何をしたらいいんだろうというところはありまして、いろいろな質疑のときに質問が来たときに答えると、余り答え過ぎるとこれは「ご意見を聴く会」ですという話で、説明会ではありませんというようなご注意もいただいたり、ちょっと立ち位置がよくわかっていなかったのか、今もよくわかっていないのかもしれませんが、そんな立場でおりました。



全部は出られなくて、非常に申しわけなかったんですが、幾つか出て気づいたのは、シンポジウムにしろ、「ご意見を聴く会」にしろ、集まってくる市民の方々は意識が高い方、ポジティブな面もあればネガティブな面もあるという方は割と集まってこられますが、やはり国民全体でいくとかなり選ばれたというか、特殊な集団の方しか集まってこないのかなという気はいたしました。国民に広く知らせる、あるいは意見を聞くという意味では、興味を持たない方にどうやって興味を持っていただくかと、そういうところをやっぱり考えないと、要は自分に関係がないことは大体無関心だということがかなり強いんだと思います。特に原子力の世界については、できれば離れていたいというような意見の方が多いのではないかなという気がしまして、この活動に参加いたしましても出てこられる方、割と意見を持っておられる方、あるいはたまたま通りかかってちょっと興味があったから聞くという方は余りいなかったのではないかなという気はいたします。そういう余り意識を持っていない方々にも意識をしていただくような、何らかの活動が必要なのかなというふうに感じました。

○中村座長 ありがとうございます。

小川委員どうぞ。

○小川委員 市民懇の一番最初からやらせていただいていますけれども、あのときは木元教子前原子力委員が、市民の皆さん、国民がこれから私たちはどのような生活をしていきたいのか、その中でエネルギー観というのはどういうものなのかというようなことを、皆さんの意見を聞くための役割として委員になってくださいということで、私も木元さんの熱情に感動して一緒にやらせていただけてきました。

それで自分が原子力委員会にかかわってから、その組織の中で見ていますと、本当にだれが見ても、ここは原子力委員会が市民に向かって持っている窓だというのが、市民参懇だと思っていたんですね。ですから、きちっと原子力委員会は政策を決めるところでしょうから、この件に関しては何々部署がやりなさい、何々部署がやりなさいと、エネ庁さんがやりなさいとか、科技庁さんがやりなさいとか、そういうようなことを言うところなのかもしれません。だけれども、原子力委員会の中にも国民に向かった窓が必要ではないかと私は今も思っていますので、今の印象がですが、その窓が閉じられるのかなと思うと、残念な気がします。

それから1年ぐらい前の話の中で、この委員会は自分たちが自分たちのことを総括するものではないというようなことが、多分議事録に載っていると思うんですが、私もそうなのかなと思って、やはり総括されるのは役所の方であって、今総括のブリーフィングを各委員の先生方からお聞きしたので納得したんですけれども、いわゆるスクラップアンドビルドとか、選択と集中とか、今社会的にも言われているようなことをするんだということであれば、私たちが残念だと思っても、いややっぱりやりたいという立場でもないと思います。ただ、一国民として思うのは、やはり原子力政策の一番責任のある部署というか、

その組織であります原子力委員会がだれから見ても市民というのを感じているというのがわかるような、組織体系があるといいなとは思っております。

それからこの市民参事の執行に当たって、結構中村座長が発破をかけて事務局さんに早くこういうふうなターゲットで行きなさいよというようなことを何回も言ってきたという私も記憶がありますけれども、なかなかそれが活発にならなかったというところから、私は事務局の皆さんがこの仕事に喜びを余り見出していないなというような、ちょっと残念なところがあって、やっぱり事務局の皆さんもそれは自分の職務としてやりがいがある、より事務局が引っ張っていくような、そういう仕事をしたほうがいいと思うんですよ。そういう意味でもある限界があったかなというふうなことは思います。

以上です。

○中村座長 ありがとうございます。

小沢委員お願いします。

○小沢委員 私も何で委員を始めたかはよく覚えていないんですけども、最近はどうエコとか、温暖化とかという中で、前に比べてはるかに出ていますよね。原子力委員会とか、原子力推進の人たちが。だから、別にご意見を聞かなくてもよくなったんだろうというふうに思っているんですが、私が一番最初関係したのは、たしか円卓会議でした。それで委員が何しろ大学の先生たちとか、専門の人たちで、議論はもう本当に緊張に緊張した議論で、もうこんなのんびりした感じではなかったですよ。何か問題が起こったときに、よくシンポジウムの司会なんかをやりましたけれども、緊張で倒れる人もいないかと思うようななどなり合いもありました。この懇談会というのは大体性格が最初からよくわからなかった。つまり研究会でもないし、議論をするわけでもないし、舞台を自分たちでつくるわけでもないし。呼んでくる人たちも、さっきの吉岡さんが紹介するみたいに、ここの委員の中のだれかがこの人はいいんじゃないかという場合もあるけれども、そうでない場合もあるし。これは賛成、推進なのか、それとも私みたいに半分ぐらい原子力については疑問はないけれども、原子力行政のあり方にはかなり疑問を持っている人間としては、本当に微妙な居心地の悪さで過ごしてきました。

役所の会議というのはきつこういものなんだろうと言い聞かせつつおまして、勉強させていただきました。ただ、私は、つまり日本というのは今もうどこにも行き場のないもやもやとしたものがあって、必ず悪い形で、ぶつぶつ爆発してくるだろうと思っっているんです。不満がどの形で出るかわからないけれども。原子力の問題だって、あんなものなくてもいいんじゃないかというようなことを言える場を、人々が持っていないとしたら、結果としてはやっぱりいい事にはならないだろうと。この会が役に立ったかということ、私は余り役に立っていないと思っっていますけれども、こんな議論をされていていいのかというようなことを表明できるような場を、定例化する必要はない、全くイレギュラーでも構わないけれども、用意する覚悟というのは、原子力委員の人たちはしていただきたい。

総括はできないですね。感想ですね。以上です。

○中村座長 ありがとうございます。

東嶋委員どうぞ。

○東嶋委員 私も総括ということについて、自分の意見はありません。ただ先ほど委員の皆さんにどのようにお考えになったかというのをおっしゃっていただいたので、原子力委員会が政策決定機関であって、そのために広報については選択と集中をやっていくんだということはわかりました。ただ、広聴・広報活動については、最初に浅田さんからご意見ありましたが、一般市民の方の中には少なくとも一人は期待されている方はいらっしゃると思います。そういう方が、市民参加懇談会ってやめたんだ、どうしてやめたのかなと疑問に思われたときに、それについてどのように委員会がお考えだったのか、その理由と、それから広聴・広報活動をこれからどうやってやっていくのかという展望をきちんと示していただきたいと思います。

以上です。

○中村座長 ありがとうございます。

吉岡委員。

○吉岡委員 やはり発展的な、解消ではなくて、新しい方向への発展ということを考えていただきたいと思います、原子力委員の皆様。

余計なことを言いますと、やはり経済の構造が大きく不可逆的に変わるとか、そういう可能性が小さくないというふうに私は今度の金融崩壊に関しては思っていて、これについてはいろいろな議論が出ていますけれども、例えば自動車が冷蔵庫みたいな買い方になるのではないかと、つまり新車を買った人が中古車にして売って、それがまたマーケットを作るといような、そういうルートがなくなる。そうすると、経済が物すごく冷え込むというのは当たり前の話なんだけれども、そのように経済構造が変わる。とくに九州は非常に大きな打撃を受けておりますけれども、変わるかもしれない。そうすると原子力もどうなるかよくわからないということです。こんな時期に政策大綱の改訂は見送ったほうがいいのではないかとというのが、私の勝手な感想でございます。

○中村座長 ありがとうございます。

私として、総括という言葉は皆さん引っかかっているようですけれども、とにかく我々が17回in地方でやってきた体験を意見交換しながら、それを多分総括という言い方をされたのであって、我々が学生時代に使った総括とは大分意味が違うのではないかと考えておりますけれども。

もともとはやはりぬえです。市民懇は。はっきりしたイメージというのは私はやっぱり木元教子さんの頭の中にしかなかったんだと思うんですよ。ただ、広聴ということを非常に強調されて、いまやこれは当たり前で広聴・広報と使っているけれども、当時は広聴というのはやっぱり白書にも言葉として初めて載るぐらいのインパクトがあったわけで、ぬ

えはぬえなりにそういうわかるどころだけでも使いながら、模索してきたというのが現実だと思うんですよ。

今振り返っても、やっぱり17回の地方版というのは、いろいろなパターンをやってきました。ただ、その基本は市民の皆さんととにかくじかに、まさに原子力委員会、国への窓を開けて見せてあげたということで、だれでも入ってのぞいてくれるよ、意見を言えるよということで始まって、その意義はやっぱりあって、ただ当時はやはり対立軸というのがあったので、今はそういうのがかなり薄れていきますよね。日本全体がちょっとぼけているから、そういうものをまたはっきりさせようとしないうちにもなっているんで、そういう意味でのスリリングさというのはだんだん薄れてきていることも一つは確かだと思うんですね。

それとやはり私が見るに、原子力委員会としては具体的な施策の実施とか、その辺の評価とかいうところに、コストエフェクティブネスというのを最初にやっぱりお考えになるから、「ご意見を聴く会」があれば、「市民参加懇談会」は何なんだというふうに思われたんではないかと思うんですね。市民懇はまさにぬえなんで、そう思われるのは当然で、しかも具体的な政策がどうこうという前の段階で、個別にとられることなく、広く国民のいろいろな広聴をしていくという役目なもんですから、非常に性格づけも難しかったところあるし、その評価というところでも難しいなと思うんですよ。まさに広報予算というようなことを考えていく中でも、やっぱりある意味、効率主義にならなければいけないし、それからトータルで原子力委員会として広聴・広報活動というのをどうあるべきかというのは、やっぱり考えていただきたいところへ来ているので、その形で市民懇が一つの役割が終わったという評価をされること自体については、そんなもんかなというふうには思っています。

ただ、我々がプロトタイプをつくった部分というのはたくさんあるし、ある意味、国民の声を聞くパイオニア的な役割はそれなりに果たしたんではないかと。それが今、お話があったように、各省庁でいろいろな形で今はっきり言って数だけはやっています。でもそれは本当に我々のプロトタイプをうまく生かしたものになっているかというところ、これまた違う評価が必要なんではないかという感じはしていますので、そうすると原子力委員会としても政策を進めていく上で、各省庁がどういう広聴・広報活動をするかということについては、まだまだ途上にあって、これからやはり新しい枠組みを考えたり、新しい省庁への影響の与え方というようなものは、やっぱりもう一度考えていただかないといけないなと。そういうのを踏まえた上で、「ご意見を聴く会」はどうなるか知りませんが、  
「市民参加懇談会」は一つの役割が終わりでしたねというのは、私の、ぬえはぬえなりの結論でいいかなというふうには思っております。

○小沢委員 中村さんが座長になって何年ですか。

○中村座長 僕は2年ですよ、まだ。木元委員がおやめになった後からですから。

○小沢委員 中村部隊としてもう1年ぐらいやったらちょっと特徴が出たんでしょうか。それはちょっと残念です。

○中村座長 そうですね。それとやっぱり原子力委員であり、これの座長を務められたという木元さんの情熱でしょう。ですからやっぱり本当のトータルイメージというのは、僕は木元さんの頭の中にしかないと思っているんですけども。もう一度、お集まりいただく機会があるので、総括という言葉には余りとられることなく、これからの原子力委員会の広聴・広報活動に対するご提言でもいいですし、インプレッションでも何でも多分構わないだろうと。それなりにどう酌み取っていただくかはこちらの問題ではないので、どういうふうに発展させていただくかを期待したいと思います。

東嶋委員。

○東嶋委員 もし次回、そのような今中村座長がおっしゃったように、今後の原子力委員会の広聴・広報活動について意見を述べてほしいということでありましたら、先ほど松田委員などからもお話しありましたエネ庁のワークショップ、NUMOのワークショップなどというお話もありましたが、私自身はそういうことを全体的にどんなことをやっているのか余り存じ上げておりませんので、全体の広聴・広報活動が今どんなになっているのかについて、資料をご用意いただけたらと思います。

○中村座長 そうですね。エネ庁もあれですし、保安院もみんな我々のを見て、いわゆる国が表へ出るというのを具体的にされていますので。20年度の活動、結構活発だったから、その実績、資料を用意していただいて。

どうぞ。

○吉岡委員 木元路線というのは、私はそれほど支持をしていたわけではないのですが、広聴・広報という枠組みになったのは木元さんのせいだと思っていて、しかしもとの円卓会議というのは必ずしもそういうところではなかった。円卓会議的なものというのは、私に言わせれば、政策に市民参加というか、市民の意見をよいものほどこし反映させるというような、そういう機能をむしろ模索することが期待されていた。市民参加の名前がこの会に付いたのもそのような背景があったからだと思うのですが、木元イメージは広聴・広報だったということですね。ですから、そのずれをどう考えるかということになると、広聴・広報活動として総括するというのは、やっぱり狭過ぎるのではないかという気はしますので、市民参加あるいは政策への市民意見の反映とか、そういう観点からも同時に考えたいですね。次回が4月に行われるのか、いつになるのか、まさか秋にはならんだろうとは思いますが。

○中村座長 確かにチームとしての広聴・広報というのが非常にインパクトがあって、いわゆる木元さんらしさというのがそこに出ていたんですけども。でも最初から市民参加というのは何かというのは、政策決定の過程で市民の意見を聞いてきて、それを何とか反映できないかというのがもともとの趣旨だったはずなので、そういう観点での当然この8

年間、17回というのは吉岡委員が言われるように、そういう形ではやっぱり振り返るといのが、まず基本だと思いますよ。ただ、何というか、手法として広聴・広報というところに光が当たっていたというのはあるけれど、もともとの趣旨として、そういうことではっきり言うと、木元委員はほかの委員長以下、ほかの原子力委員を説得して、これが発足したというふうにはたしか当時は記憶していますから。

その意味での役割というのが、例えば「ご意見を聴く会」がとって代わることができるのかというあたりはやっぱり考えなければいけないところで、それから最初に浅田さんが言われて小川さんや東嶋さんも言われたように、毎回の17回の記録が残っていて、その最後のアンケートで必ずこれからに期待するかどうかという設問が必ずありますよね。これについていえば、同じところでずっとやっているわけではないので、それぞれ新しいところへ行ってやっていますから、そこでは初めてのインパクトなんで、それなりの評価を全部いただいていますよね。そういうこともやっぱり踏まえてほしいというのは当然、我々やってきた者としての印象ではありますけれども。

そういう意味で、改めてもう一度みんなで集まって総括をしるというふうに受け取ってよろしいですか。

○近藤原子力委員長 総括という言葉は余り。

○中村座長 適当ではないかもしれない。

○近藤原子力委員長 私が総括と書いたのですが、今お話しいただいたようなことが大事なことであって、そういうことをお話ししていただいて、それをとりまとめさせていただきたいと、そういうことなんです。

それから、皆さんが感想を述べられているから、私も個人的感想を少し申し上げると、吉岡さんが言われたように、この名称からしても、この会は、政策決定過程における市民参加を実現する場として設置されたのでしょうけれども、私が関与させていただいた範囲では、これが政策決定過程に対する市民参加の場と思えたのは、むしろ委員会が開催した公開討論会とか、原子力部会の説明会に説明役で参加した時ですね。たぶん自分が政策をデフェンドするサイドにおかれて、市民の皆さんと直接意見交換したからだと思うんですが。

私が委員長になってから、この会合に対する木元さんの思いをお聞きして、この会合に参加して、思いはよくわかったのだけれども、私としては、円卓会議のやりとりと長期計画策定会議を思い出して、政策決定にはそれなりの準備や分析、目配り、気配りがあって、そのそれぞれに当然市民の考え方、関心事が反映されなければならない、だから、論点を絞って議論することにしないといけないと考えて、その装置として臨機応変に対応できる拡大原子力委員会を開催することにしました。論点というぐらいに、施策案なり技術的な判断についての甲論乙駁があって効果的な議論ができたからです。

で、この会は、そういうことよりは、市民が政策を巡っていろいろな議論があることを

それぞれに確認する場とすることを目指しておられる、先ほど申し上げましたように原子力政策に関しての市民の意見のアンテナショップを目指しておられると理解しました。なんどかそのように申し上げたと思います。ただ、市民の側が、これを原子力委員会の考えをとらえるアンテナショップとして利用するべく、そんな質問や批判をし、中村座長がこちらに振ってくれる限りにおいては、そのようにも活用されましたね。で、それはそれでよかったという感想が委員会でも飛び交っていたと思います。さらに、委員会で議論して政策提言などを詰めていくときに、市民一人一人がいろいろな思いも持って注視しているということをいつも頭の隅に置いていることはとても重要ですので、この会合を定期的にもつことは、そういう感性を活性化させておくことにインパクトがあったことも事実です。

ですから、これから新しく改訂作業に取り組むときに、トータルな決定プロセスの中にそういう機能をどうやって装置していくかを今後検討したい。で、については、この会の活動を総括して、政策決定過程への市民参加というけれども、それはどうあるべきというご提言を体験を踏まえての感覚的なもので結構ですから、いただきたいのです。もう自分で総括してしまったりも思いますけれど。で、今後これが有する機能を委員会活動のなかでどう機能させていくかについてはその後、委員会として考えます。この懇談会には有意義な機能があって、それは引き継がれるべきと考えてのお願いなのです。この会の存在意義を委員会が否定したかのごとき報道がなされるのは私としては心外なので、くどく申し上げました。

○新井委員 そのこのところは余りあいまいに言うからおかしくなってしまうんで、終わってしまうんだということをちゃんとおっしゃられたほうがいいと私はいいと思いますけれども。

○中村座長 市民懇ってこれだけそれなりに開催実績だけはあるんで、ある種のやっぱり社会性を伴っていると思うんですよね。ですからそういう意味で、終了宣言というのは新井さんが言われるように明確な形で出されないと、やっぱりおかしいなとは思っていますね。

東嶋さんどうぞ。

○東嶋委員 また次回の会合の件なんですが、いいですか。

先ほど資料をそろえてくださいと言いましたついでに、もう一つお願いしたいんですが、総括という言葉はともかく、私たちがそれぞれの経験を通じて感じたことを申し上げる機会だと思えますけれども、それ以外に事務局の方の手をわずらわせることになるかと思いますが、これまでの記録というのがあって、例えばアンケート結果で、例えば埼玉で土曜の午後にやったらどういう人が来て、どんな意見、どんな感想だったかとか、そういったような属性分けとか、意見が好評だったか不評だったかとかいうのがあったと思うんですね。

そういうことをやっぱり今後のそういうシンポジウムを開いたりするときに、データと

して生かせればと思いますので、その17回開いた分について、そういう要素分けというんですか、そういうことができるようなことがありましたら、していただきたいと思うのですが。ただ、私たちが感想を述べるよりは。

○中村座長 いや、まさに総括はそうしないと総括にならないですよ。18回、in鹿児島も含めて、データは同じようなとり方をしているんですから、それをやはり総括するというのか、要覧化するということか、そういう作業はあるんではないですか。

○田中原子力委員長代理 一言いいですか。

大事なことはこういった活動が原子力委員会の政策とか国の政策にどういうふうに反映すべきかということをおっしゃる方がもう長いこといろいろ経験されているから、その立場でぜひそういうご提言をいただくということが、総括という言葉で適当ではないと思うんですが、私は事務局が分析することには余り意味を感じないんです。これだけのキャリアをお持ちの、経験をお持ちの方々がきちんとそういうことを言って、ここはよかったけれども、ここはこういうことをしないと原子力の政策を決める過程では今後まずいですよとか、ぜひこうしたほうがいいですよという、そんな個性あるご意見を聞かせていただきたいと思えます。私は原子力委員会にいつまでいるかわかりませんが、それはずっと残るよりにやろうと思います。

○中村座長 市民参加懇談会がこれまで発言してきた役割、あるいは目指しながら到達できなかったこと、いろいろ皆さん思われる点もあると思いますので、in鹿児島の開催が終了後、しかるべき時期にまた顔を合わせて、委員相互の意見交換をするとともに、原子力委員会に対する我々のこの18回の経験を踏まえての提言とまでは行くかどうかわかりませんが、感想とか、提言ではないけれども、提案ぐらいにはなるかもしれない。そういうことも含めた会合というのを一度持ちたいというふうに考えております。それについてはまた改めて事務局のほうからご連絡をいただいて、日程調整等をしていただくことにしたいと思います。

それ以上に原子力委員会のほうとして、我々委員個々に今後の発展のために意見を求めたいというようなことがございましたら、それはまたちょっと次回34回とは別途にお考えいただくとありがたいなというふうに委員としては思っています。我々委員としての市民懇を34回でまとめると、あえて総括という言葉を使わずに、という会は一度ご要望もありますので開催したいと思いますけれども、それ以上のことについては、委員のほうから要望があれば事務局に、それから原子力委員会のほうからご要望があれば各委員にご連絡をいただきたいなというふうに思っています。

本日の審議及び意見交換はこの程度でよろしゅうございますか、委員の皆さん。

それでは、活発なご発言、ありがとうございました。

これで33回目の市民参加懇談会は終わりますけれども、次回は皆さんそれぞれちょっと小川委員は欠席ですけれども、スケジューリングを上手になさって寒波襲来ということ



にも対応できるような形で、2月15日の鹿児島市民懇を実施したいと思いますので、よろしくご協力をお願いします。

あとは事務局のほうから連絡事項等があれば、連絡いただければと

○事務局 連絡事項でございますが、鹿児島、2月15日に向けて、きょうのご意見を踏まえまして準備を進めたいと思います。その過程ではいろいろとご連絡をとらせて、日程調整等、細かな調整等は聞いていただければと思います。

それから今ご議論ありました次回34回につきましては、また後日日程調整をさせていただければと思います。きょうのご議論の中でいろいろとリクエストのありました資料につきましては、できる限り準備できるようにちょっと頑張りたいと思いますので、よろしくお願いたします。

それから本日の議事録、皆さんにまたご確認いただいて、その上で公開をしたいと思いますので、よろしくお願いたします。

○中村座長 それでは、どうもお疲れさまでした。これで33回の市民参加懇談会を終了いたします。ご苦労さまでした。ありがとうございます。